余情残心

〔日〕松本杏花 著

叶宗敏 译

上海译文出版社

余情残心

〔日〕松本杏花 著

叶宗敏 译

上海译文出版社

图书在版编目(CIP)数据

余情残心/(日)松本杏花著；叶宗敏译.
—上海：上海译文出版社，2007.3
ISBN 978-7-5327-4209-7

Ⅰ.余… Ⅱ.①松…②叶… Ⅲ.俳句—作品集—日本—
现代 Ⅳ.I313.25

中国版本图书馆CIP数据核字(2007)第017866号

余情残心/〔日〕松本杏花 著　叶宗敏 译

上海世纪出版股份有限公司
译文出版社出版、发行
网址：www.yiwen.com.cn
200001 上海福建中路193号 www.ewen.cc
全国新华书店经销
上海商务联西印刷有限公司印刷

开本 850×1168　1/32　印张7.125　插页2　字数44,000
2007年3月第1版　2007年3月第1次印刷

ISBN 978-7-5327-4209-7/I·2372
定价：18.00元

本书中文简体字专有出版权归本社独家所有，
非经本社同意不得连载、摘编或复制
如有质量问题，请与承印厂质量科联系。T: 021-56135113

作者像

行吟自有清心
——读松本杏花的《余情残心》

林　岫

今年初冬，在香港城市大学教授餐厅的一次聚会上，谈到作诗的难易，有位小诗友问我“长诗与短诗，孰难孰易”，我回答：“论诗只论工拙，不计长短，很难判断孰难孰易。如果一定要断出难易的话，诗短（语汇量少），写得又上好的，应属大不易。”回答时，我想到了中国古今文学宝库中数以千万计的脍炙人口的精美短诗，当然也想到了日本的俳句。

日本俳句简短而精美，多写自然与人生，很像一杯清香隽永的佳茗。俳句那种俗中透雅、苦涩中颇生谐趣的特殊风味，是日本民族文化所特有的。只有反复地吟味，细品，读者才能真正领会这些貌似平常的短诗沁人心脾的蕴涵。譬如松尾芭蕉、与谢芜村、小

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

林一茶等古代日本著名俳人的杰作，自不必说，就是展读上个世纪至今活跃在日本俳坛上的那些俳人的俳作，我也常如偶品清茗似的享有“啜饮一口，留香三日”的美妙感受。

2005年初夏，南京叶宗敏先生曾寄来一本译著，是日本女俳人松本杏花的俳句集《拈花微笑》。初读一过，我已经为她细腻动情的“摄影手法”所陶醉了。一缕梅香、几点渔火、满园菊黄，甚至倒贴的“福”字，泥塑侍女的凝眉等细节，都经她的俳句“照相机”，成功地记录成现代生活中一个又一个富有诗情画意的镜头。

没想到，时过两年，松本杏花又为中国读者呈上了一本俳句集《余情残心》。叶宗敏先生寄来译稿，希望我能为这本书作序。因为已有《拈花微笑》的深刻印象，所以我便毫不犹豫地应允了。

松本杏花是当代日本的俳句诗人。虽然集中充满当代日本现实生活的强烈气息，但阅读她的俳句，我仍然能依稀感受到日本传统俳句特有的炽热情感的冲击。

真诚美，是日本传统俳句的精髓。古代俳句所表现的清寂境界，发人幽思，都蕴藏着俳人真实诚挚的情感。松本杏花集中写红风湖与中国游客同舟欣赏红叶的勃勃兴致，又在斗兽场听到奴隶跟牛搏斗求生的讲解时感到彻骨的寒冷，又仰望朗月犹思与月共语，

以及端午节为孙儿洗菖蒲浴的那种怜爱与希望的激情，都自然流露出了她关注自然和人生的真诚。这大概就是日本俳句与人生、自然的真情之缘吧。

朴素美，应是日本俳句的另一个重要特色。松尾芭蕉的“菊の香や奈良には古佛達”（奈良多古佛，长伴菊花香）、“病雁の夜寒に落ちて旅寝哉”（病雁长空落，旅宿夜生寒），与谢芜村的“鹿なくや宵の雨暁の月”（雨宵侵晓月，闻得鹿呦呦）、“月天心貧しき町を通けり”（影单穿陋巷，明月过天心），小林一茶的“秋风やむしりたかりし赤い花”（秋风残照里，悼女采红花）、“身の秋や月は無瑾の月ながら”（月璧今成缺，身亦似寒秋）等朴素得如同直吐心声的俳句代表作，都没有饰彩，没有矫情，已经让日本人痴迷了几百年，也同样能让中国的文化人陶然如醉。今天从《拈花微笑》和《余情残心》两本俳句集中，读者都不难发现，松本杏花显然继承了日本古代俳句所特有的朴素之美。我比较喜欢《余情残心》集中写见大瀑布珠飞玉溅，立刻穿上雨衣的喜悦，听长老吹笙联想秋声，暗传对岁月的感叹，还有说霜夜的白霜会使风干的柿饼味美甘甜的认真，从密树浓阴中眺望医院，抒发对画家凡·高的悼念等作品。这些作品都有一种对面话语般的亲切感，表现了松本杏花的睿智和

敏悟，很富有感染力。

日本俳人大都喜好旅行。旅行生活给予日本俳人丰富的创作源泉，也为他们开拓眼界提供了广阔的天地。松尾芭蕉多年飘泊各地，云游各地的旅痕留下了他对自然和人生的热爱，也让他体验了人生的艰辛，故而形成了芭蕉俳体的独特风格。这种行吟特征，在很大程度上影响了后世的俳人。从松本杏花在本国、欧洲和中国的旅行俳句中，我深深地感受到了这种行吟传统的脉动。无论走到哪里，她既是一名旅行者，更是一位俳人。行吟自有清心，她以敏锐的观察力捕捉旅途中的每一个动人的画面，即使它稍纵即逝。写黄金的柿子在风中落下（动趣），写水户光国苑的月下败荷（静趣），又以春行的脚步会磨损胜地的石阶体味生命的消磨（禅趣），以及灯前欣赏白菊忽然产生的物我合一之情（禅趣），都能给读者一些“惊奇意外，又恰人情理”的非同寻常的艺术享受。

古今的日本俳人大都有“中国情结”。有的寝馈汉文学颇得功力，有的援笔甚至也作汉诗。松尾芭蕉不但崇尚唐诗，还将汉诗的意趣与俳谐的简洁兼容相揉，创造过在日本文坛很有影响力的俳文体。在俳句创作中，追求一种雅俗相尚，以简淡出脱奇情逸趣的新意境，正是他长期研读习尚汉诗所获得的春华秋实。

松本杏花俳句集中有相当数量的作品是描写她的旅华见闻。无论是写攀登长城眺望彩霞，上海外滩的繁华，还是写离别苗寨的依依难舍，农户檐下火红的串串辣椒，都表露出她对中国壮丽湖山以及社会人事的关注和热爱之情。唯情之所至，故其诗则如涓涓之泉。

译文不易，译诗愈难。虽然中日翻译界公认，译诗难保俳句的原汁原味，但叶宗敏先生的翻译还是雅达相兼地保留了原诗的精彩。为了方便中国读者，叶宗敏先生在翻译原诗之外，附录了日文，足资佐读参考，还对松本杏花创作这些俳句的本事和诗境的时空诸态加了说明。这些说明文字语言简洁优美，类同一篇篇精悍的抒情散文诗，跟松本杏花的俳句互作辉映，绿叶扶花，可以帮助深化对原诗的理解，肯定会获得广大中国读者的青睐。

寒窗文就，思绪却犹有未尽。忽然觉得，拙笔极似松本杏花写的那只寒晓的渔船，不知是已经抵岸还是正欲出港？

是为序。愿松本杏花的诗情跟日本俳句一样永远美好。

二〇〇六年十二月一日

于北京紫竹斋冬窗灯下

吟行には自ずと清き心が有る
——松本杏花の『余情残心』を読んで

林　岫

今年の初冬、香港城市大学の教授食堂でのパーティで、作詩の難易の話題になった時、ある若い詩友が、私に「長い詩と短い詩とどちらが易しく、どちらが難しいですか。」と聞いた。私は、「詩を論じるとき、ただ上手か下手かだけを論じ、長いか短いかは問題にしなければ、いずれが難しく、いずれが易しいかはなかなか判断できない。もしどうしても難易を言い切るならば、詩も短く（語彙数が少ない）て、しかも極めて上手に書けたものは生易しいものではない。」と答えた。その時、私は中国の古今の文学宝庫の中の、たくさんの人口に膾炙してきた精巧で美しい短詩を思い出し、勿論日本の俳句をも思

い出したのである。

日本の俳句は簡潔にして精美であり、自然と人生を詠んだものが多く、あたかも薫り高くて味わえば味わうほど味が出る極上の銘茶のようである。俗の中から上品さを透し、苦渋の中から諧謔の趣がすこぶる生ずるという俳句の特殊な風味は、日本の民族文化特有のものである。読者は、くりかえし吟味し細かく味わって始めて、これらの平常のように見える短詩が深く人の心に沁(し)み込む含意を真に理解することができる。たとえば、松尾芭蕉(まつおばしょう)、与謝蕪村(よさぶそん)、小林一茶(こばやしいっさ)などの古代日本の著名な俳人の傑作は勿論のこと、前世紀から今日まで日本の俳壇で活躍してきた俳人の俳句を読んでも、私はいつも、たまに銘茶を味見するように、「一口啜(すす)ると三日間も香りが残る」という美妙な感銘を受けている。

2005年の初夏、南京の葉宗敏先生が日本の女性俳人松本杏花の俳句集『拈華微笑(ねんげみしょう)』という訳書を送ってくださった。一読してみると、もう彼女の細微で感動的な「撮影の手法」にうっとりしてしまった。一筋の梅の香り、いくつかの漁火、庭に満(み)ちて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

いる菊、ひいてはさかに貼った「福」の一文字、塑像の侍女(じじょ)の眉などの細部まで、彼女の俳句の「カメラ」を通して、現代生活の中の一つまた一つの詩意と画意に富んだカットとして成功裏に記録されている。

思いがけないことには、二年経って、松本杏花はまた中国の読者に俳句集『余情残心(よじょうざんしん)』を奉げてくださった。葉宗敏先生は、訳書の未定稿を送ってきて、私に本の序文を書くようにと要請された。すでに『拈華微笑(ねんげみしょう)』についての深い印象があるので、私はためらわずに引き受けたのである。

松本杏花は当代日本の俳人である。本句集は当代日本の現代生活の強い息吹きに溢れているにもかかわらず、彼女の俳句を拝読して、私は、やはり日本の伝統俳句に特有の熾烈な感情に軽いショックを受けた。

誠の美は日本の伝統俳句の真髄である。古代俳句が表した物寂しい境界は人々をして物思いに耽(ふけ)らせ、いずれも俳人の誠の感情を蓄(たくわ)えている。松本杏花集の中で書かれた、紅風湖で中国の観光客と同じ

船に乗って紅葉を観賞する津々たる興味とか、闘技場で奴隷が牛と格闘して、生を求めるという案内者の解説を聞いて冷えわたるような寒さを感じたこととか、明月を仰いで月と語り合うこととか、端午節句の時孫に菖蒲湯を使わせたその可愛がりぶりと希望の激情とかが、いずれも自然と人生に関心を寄せる彼女の誠を自然に現している。これはおそらく日本の俳句と人生、自然との真情の縁であろう。

素朴の美は日本の俳句の今一つの重要な特色と言えよう。松尾芭蕉の「菊の香や奈良には古佛達」(奈良多古佛，长伴菊花香)、「病雁の夜寒に落ちて旅寝哉」(病雁长空落，旅宿夜生寒)、与謝蕪村の「鹿鳴くや宵の雨暁の月」(雨宵侵晓月，闻得鹿呦呦)、「月天心貧しき町を通けり」(影单穿陋巷，明月过天心)、小林一茶の「秋風やむしりたかりし赤い花」(秋风残照里，悼女采红花)、「身の秋や月は無瑾の月ながら」(月璧今成缺，身亦似寒秋) など本音を吐露しているのにほかならない素朴な俳句の代表作は、飾りもなければ奇矯もなく、既に日本人をして、何百年も心を奪われてぼっとさせ、と同様に中国の文化人をも、うっとりさせることができたのである。今日、『拈華微笑』と『余情残心』の二冊の俳句集から、

読者は、松本杏花が明らかに日本古代俳句に特有な素朴の美を受け継いでいるのを見出せよう。

私は、『余情残心』の中の、滝の飛沫を見るとすぐ雨合羽を着る喜びを書いた俳句や、長老が竹の笙を吹くのを聞いて秋の声を連想し歳月を嘆くのをほのめかした俳句や、霜の夜の白い霜で干し柿が甘くなると真面目に語った俳句や、木の間から病院を眺めて画家ゴッホを偲ぶ心情を表した俳句といった作品が好きである。これらの作品にはみな、向かい合って話し合っているような親密感があり、松本杏花の叡智とすばしこく賢いを表していて、非常に感化力に富んでいる。

日本の俳人の多くは旅行が好きである。旅の生活は日本の俳人に豊かな創作の源泉を与え、視野を広めるための広々とした天地を提供した。松尾芭蕉は長年各地を漂泊し、各地を行脚していた旅の足跡が自然と人生に対する愛着を残し、彼に人生の辛苦を体験させ、よって芭蕉俳句にぎんこう風格を形作ったのである。こうした行脚しながら吟ずる所謂「吟行」の特徴ははなはだしく後世の俳人に影響

を与えた。松本杏花の、自国とヨーロッパと中国での旅行俳句から、私は、こうした吟行の伝統的な脈動を深く感じた。どこに行っても、彼女は一旅行者であり、一俳人でもある。吟行には自ずと清き心が有り、彼女は、たとえちょっと放つとすぐ消えてしまっても、その旅での一つ一つの感動的画面を鋭敏な観察力で捉えた。風の中を落ちる黄金色(こがね)の柿の実を書いた俳句（動的な趣)、水戸光国苑の月下のはいかを書いた俳句（静的な趣)、春の観光客の歩行で名勝地の石の階が摩滅(まめつ)するのを生命のおとろえに喩える俳句（禅の趣)、灯下で白菊を観賞するとき突然生まれた物我一如(ぶつがいちにょ)の境地(きょうち)を書いた俳句（禅の趣)は、いずれも読者に「意外でありながら情理にかなう」という並々ならぬ芸術的な楽しみを与えたのである。

古今の日本の俳人のほとんどが「中国の絆(きずな)」を持っている。ある人は漢文学を学んで腕前を身につけ、ある人は筆を取り、ひいては漢詩をも作る。松尾芭蕉は唐詩を尊んでいたばかりではなく、漢詩の趣と俳諧の簡潔とを合わせて受け入れ、日本の文

壇でかなり影響力のある俳文体を打ち立てたのである。俳句の創作で、雅俗が相尊び、簡単なのをもって、奇抜な情趣の新しい境地を切り開いたのは、正に彼が長年漢詩を研究し、尊んでいて獲得した成果である。

松本杏花の俳句集には、中国観光の見聞を書いた作品がかなりある。長城に登って霞を眺めるのを書いた俳句にせよ、上海のバンドの賑やかさを書いた俳句にせよ、苗族の人との別れ際の名残惜しさを書いた俳句にせよ、軒に吊るした真っ赤な唐辛子を書いた俳句にせよ、いずれも中国の壮麗な山河と社会人事に寄せた彼女の関心と愛情を表している。情が働いたからこそ、その詩がこんこんと流れ出る泉のようである。

文章を訳すのは易しくないが、詩を訳すのはなおさら難しい。中日翻訳界では、俳句の翻訳はその元の「味」を保つのが難しいとされているが、葉宗敏先生の翻訳は、上品さと達意とを兼ね備えて原詩の素晴らしさを保っている。中国の読者に便宜を図って、葉宗敏先生は原詩を翻訳したほかに、参考になるようにと日本語を付して、松本杏花がこれらの俳句を創作したストーリーと詩境の時間と空間の

もろもろの状態に説明を加えた。これらの説明は言葉遣いが簡潔で美しく、精悍な抒情散文詩に類似し、松本杏花の俳句とこもごも照り映え、緑の葉が花を扶助するように原詩に対する理解を深めるのに役立って、広範な中国の読者から歓迎されるであろう。

寒窓下でこの序文を書き上げたが、考えの筋道はまだ尽きていない。拙文が極めて松本杏花の書いたその寒暁の漁船に似ていて、もう岸に着いたのか、それとも海に出ようとしているのであろうかと、突然こう思った。

之を以って序文と致す。松本杏花の詩情が日本の俳句と同じように永遠に美しいようにお祈りする。

二〇〇六年十二月一日

北京紫竹斎の冬窓の灯下にて

（龔志明 訳）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo